

1985年11月号

ふたたび上がりはじめる。幸いなるかな、私はふたたび生の方向へいっさんに駆け出しはじめたようである。

(お茶の水女子大学教授・英米文学)

## 歌をつくりながら

中野 菊夫

私はいま、日本人男性の平均年齢くらいのところにいる。女性の平均年齢にはまだ少し間があるので、妻には時々、よろしくたのむよという。自分は亭主よりあとに残るのはまっぴらだから、お一人になったときのことを考えて、何でも一人ですることを、いまから実行しておいてくださいという。

妻も若いときは結核で療養所生活を一年くらいしていたし、私も絶えず病気をしてきた。いまでも高血圧で十二指腸潰瘍だし、糖尿病なのだ。妻は胆石をとったので、完全体ではない。それでも二人とも、平常な生活をしているのは幸運というほかはない。病気が決定的になるほどわるくならないうちに医者にかかっているせいと思っている。医者とは仲よくしている。いい医者にめぐり逢ったのが幸せだと思っている。

妻も、私も時々外国旅行などするが、医者の言はよく守って行動している。海外にいつている間に医師の手当てをうけたことはない。無茶な酒のみではないし、分相応な食べ方をしている。

運動はほとんどしない。歩くくらいがせいぜいだが、それもめんどろで、このごろはほとんど車に乗るこ



ちんげん

とにしている。それでも、できるだけ行きはバスか電車にして、かえるときだけを車にしている。週に五日は出かける。講演、講座や、何々の会合である。声を出すのが身体にいいらしい。それでも、一日三回、午前、午後、夜と喋るときすがに疲れる。なるべく二回までということにしているが、そうばかりはいかない。求められればうけることになる。妻は、断ればよいのにという方が、やはり喋ることが好きなだろう。老人になって歌をつくりたいという人が多いが、老人の集まりはたの

しくない。この間テレビで、歌会の場面があつて考証をたのまれ出かけたが、若い女優さんたちをみるのはまことにありがたい。ディレクターらも若いし、誰もが生き生きとしているのに、老人である私を大切にしてくれるのはたのしかった。(歌人)

## 死と生

中嶋 嶺雄

この春から夏にかけて私のごく近い周辺で三人の友人や近親者が逝った。いずれもガンである。生命を維持するためとはいえ、それらの病者たちは、いずれも重い手術を施され、その結果がガンであることを自覚した者も、そうでない者もあつた

が、一応はガン以外の病気であると安心させられたり、ガンでも回復の見込みがあるのだと励まされ、皆同様に最後まで病室で点滴を受け、こられた皆に共通したことであつたが、死の二週間ほどまえは一時的に体重がふえたり、元気が出たりしたのである。

いずれも四〇代から五〇代の働き盛りであつたし、私にとつてはかけがえのない人たちであつたので、なんとか生き長らえることはできないものかと、私自身、友人の医師や癌センターの先生を尋ねたり、丸山ワクチンや温熱療法の本を読んだりしたのだが、いずれも救済の余地なき重症者であつた。

三人のケースとも入院、手術、一時的な元気の回復、そして死というプロセスも類似していたので、最後の従兄の場合など、多少元気になつ

て一日、二日の自宅療養を医師から許されたと聞いたとき、それは死が近いことを私は覚悟していたつもりである。

そして、私としては、いかに現代の医学が信頼性の高いものであつても、発病から死までいづれも数か月しかなかったのだから、それならいっそのこと切開手術もせず、入院せず自宅で平常通りの生活をさせてあげたうで、自宅のベッドで死を迎えることができなものかと痛切に思ったのだが、なんとかならないものだろうか。

ごく近い人びとが、このように相次いで世を去つてゆくと、自分の生は、もう余剰の人生であるかのようにならわけてくる。自分自身もだから健康には留意せねばと思う反面、自分もいつ死ぬかもしれないという一抹の不安のなかで、今も私は原稿や

著作の締め切り時間とたたかっている。  
(東京外国語大学教授)

## 個人雑誌の刊行

野沢 豊

一九八一年に個人雑誌「近きに在りて」—近現代中国をめぐる討論のひろば」を創刊し、最近では年二回(五月と十一月)定期に近い刊行が可能となつて七月号まで来たが、カットに使つてきた一九六四年の訪中の際に書きためたスケッチが種切れにならうとしている。下手でも、若い時には平気で、中国各地で大急ぎでスケッチしまくつたが、最近ではおくれれて、宿舍からの眺めを丹念に描く形となり、量産はできなくなつ

てしまった。

来年、勤務校を停年退職しての第一の願望は、スケッチの腕を磨くことだが、国立二十年、私立六年、公立十一年の計三十七年大学に勤務したものの、その都度退職金をもらつているので、年金は思つたほどではなく、どこか私立大学にでも再就職しないことには、個人雑誌の続刊もむつかしくなりそうで、絵画教室に通うなど悠長なこともいつていられないようである。

もちろん、原稿料など出せるものではなく、雑誌や抜き刷りをお礼に差し上げる程度だが、それでも若い研究者の皆さんが積極的に投稿してくれて、内容のあるものを刊行していることは、うれしい限りである。宣伝もせず、購読者も限られているので、赤字つづきだが、それで飯が食えなくなる訳でもないので、健

康でいるうちは続けたいものと思つている。カットも、若い研究者たちの子供の絵を載せていくことを思いついたので、次号には、孫たちが我が家に来るたびに、小さい時から書かせて、時々、家の中にかざつてい

る絵から載せていくつもりである。写真撮るのも好きで、国際学術討論会への参加で、一九八三年に武漢など、昨夏は天津、昨秋は広州など、今春は北京近郊などを訪問し、小型カメラで撮りまくつた中から、気に入つたものを選んで引き延ばし、学生時代から行きつけの理髪店



に額入りでかざつてもらつたりしているが、カットに写真を使うことも考えているのでもある。また、誰か中国でスケッチしたものを無償で提供して下さる人がいないものかと思つたりしている。雑誌の刊行は、気苦勞も多いが、楽しみはそれを上回るものであることはいうまでもない。

(東京都立大学教授・中国現代史)

## 二十一世紀は バラ色か

早川 保昌

目前に迫ってきた新しい世紀は、アジア・アフリカ・南米などの現在開発途上にある人間集団が一斉に開花して、地球表面がピンクで覆われると期待されている。久しい間人が

人を圧迫したり、親分が子分を酷使したり、老人が若人を馬鹿にしたりする社会環境は全くなくなり、人は人らしく生き、地の隅々まで開放されてルネッサンスが完結するのだといわれている。

私は昨夏ギリシアを放浪する機会があつて、その際発掘物を展示してある博物館で、五千年前の人骨を見た。保存が良く頭部やアゴの部分は容易に観察できた。第三大白歯(親知らず)は径一・五センチほどであり、当時の人間の顔はチンパンジーのように相当出張つていたと想像できた。私は現代人・ホモ・サピエンス・サピエンス)が今と全く同じ顔形で数万年前から地上を歩いていたと思つていたから驚いた。その時点では人は火を使いこなせず、生の木の実などをかんで食べていたのであろうが、その後調理が発達し食品をかむ

ことが重要でなくなり、第三大白歯の使命は終わつて親知らずに退化し、われわれの平べつたい顔になつたとしか考えられない。進化とか退化とかいいう現象は高度に発達した人類にとっては必ずしも何万年もの年月を要しないらしい。

今世紀末になつて、高分子化合物の開発・ネオセラミックの応用・計算機ソフトの進展により、人によつて作られた人工頭脳が人間頭脳の平均より高くなつて、人は物事を深く考えなくなり、また日本語のワープロの普及で文字を書かなくなつてきた。人の頭脳は十分に活用しなくてすみ、大脳細胞は急激に減少してしまふだろう。長年月をかけてたどりついた大脳皮質の進化は止まつて、動物人間になるのではなからうかと憂えざるを得ない。

(昭和女子大学家政学部長)